

「受容する」ということについて考える

東海大学健康科学部教授

(袖ヶ浦のびろ学園・袖ヶ浦ひかりの学園嘱託医) 小林 隆 児

最近発達障害の療育において「受容する」ということに対して批判的な意見をよく耳にするようになった。恐らくそうした批判のもとには、自閉症に対する心理療法がいかにも無効であったかという主張が込められているように思えるのである。そうした批判的考えが生まれるのにはそれなりの理由もあるのであろうが、どうもその根拠をきちんとした形でもって論じている研究者は私の知る限りではほとんどいないようにみえるのである。それはなぜであろうか。

「受容する」とは誰でも比較的気軽に使っているようにみえる。ことばを代えて言えば「あるがままに受け止める」とでもいったらいいのであろうか。どういった心的構えを持っていれば「あるがままに受け止めた」ことになるのであろうか。

ここでまず考えて欲しいと思うのは、子どもの気持ちや行動を「受容する」場合に、子どもを「受容する」側のわれわれ（と仮定しよう）という主体はどのような心構えを持てばよいのであろうか。なんらかの価値判断を無くして、無の境地で子どもに接するようにすることなのであろうか。極端な場合には「全面受容」とさえいわれることもある。子どもがどんな状態であれすべてを受け止める、受け入れることが大切だ、ともよく聞かされることがある。

そもそも行動の主体である子どもがなんらかの行動を起こした際に、われわれが受け止めようとした時の構造を考えてほしい。恐らく子どもはなんらかの動機があって行動を起こしているのであるが、受け止めようとするわれわれは子どもの動機を実はどれほどまでに正しく把握しているのかを考えてみる必要がある。そう考えてみると実に疑わしくなるのである。そのこともさることながら、もっと問題としなければならないのは、受け止める側のわれわれは子どもの行動をまったくの無色透明な目でもって本当に捉えているのであろうか。全く何らかの価値観を持たずに受け止めているのであろうか。実はそんなことは現実にはありえない。われわれの主観というフィルターを通して子どもの行動を受け止めている訳であるから、そこには必ずやなんらかの価値判断が働いている。そんなことはないと言ったところで「受容する」という態度を取ること自体にもなんらかの価値判断が働いてそうしている訳であるから、このことは逃れられな

い現実なのである。

「受容」という問題を考える際には、その出発点として今述べたようなことをまず認識してみることは大切だと思うのである。それはなぜかと言えば、「受容する」ということは実はわれわれ自身にとってもそんなに容易なことではないことは日頃の療育実践の場で痛感していることである。「受容」しているつもりでも周囲の者には「受容」していないようにしかみえないことが結構あるし、「受容する」姿勢でもって療育をしている人々をみて、どうも筆者にはすんなりと受け止められないものを感じられることも少なくない。どこかに「胡散臭さ」を感じ取ってしまうのである。「受容」という言葉から受けるイメージと現実の療育の内実をみてその落差の大きさを感じ取ってしまうのかもしれない。

われわれは誰かの存在を受け止めようとする際には必ず自らの生活史に基づいた文化的価値観などといったフィルターを通して受け止めている。例えば子どもの行動をかわいと感じ取って全面的に受け止めているとしよう。その際のかawaiiと感じ取っているのは、実はその人がこれまでに培ってきた体験的価値観に基づいているのである。勿論意識の世界ではわからない次元のことも多いが、それでもやはりそれはその人の歴史的産物なのである。ここでいう歴史的産物とは、その人がこれまでの対人交流の蓄積の中で体得したものといっているかもしれない。

そこで筆者が強調したいのは、「受容する」という行動を子どもに対して取った際に現実にはどのようなことがそこで起こっているのかをしっかりと意識化することの大切さである。子どもの行動に対して療育者が「受容」的態度でもって接する際に、肯定的な態度である場合が多かろうが、そこで大切なことは、子どもの行動のどの点に対して肯定的態度を示したのか、ないしは子どもは療育者の肯定的態度を自分の行動の何と関連してどのように受け止めたかを考える必要があるということなのである。どうも話が複雑になって恐縮なのであるが、わかりやすく言えばこういうことである。つまり、第一に子どもが何らかの行動を起こす際の動機(動因)、第二にそれに基づく行動、第三にそのような子どもの行動が一般的にどのように受け止められているかということ、そして第四にその行動を受け止める際に療育者がその行動に対して感じ取った意味、以上の4つの次元でもって問題を整理する必要があると思うのである。

例えば、子どもが攻撃的な行動を盛んに起こしているとしよう。一般的にはこうした行動は好ましくない行動とみなされているのだが、受容的な療育者は子どもの攻撃性の背後に子どものなんらかの気持ちを感じ取って受け止めることが大切である、ないしは受け止めてやりたいと感じ取って接している場合は確かにあると思う。しかし、それで

も療育者の心の中には痛み、怒り、やるせなさ、腹立たしさ、虚無感などが少なからず交錯するものである。筆者はそのことが悪いと責めるつもりは毛頭なく、そうした感情や考えが生まれてくるのがとても大切で、かつそのことを正面からしっかりと受け止めることこそがより大切だと思うのである。つまりは、子どもを「受容する」ことは、まずもって療育者自身を「あるがままに受け止める」ことを通してしか始まらないと思うからである。

次に考えたいのは、療育者が「受容する」場合、必ず子どもに対してなんらかの行動でもって反応しているということである。当然至極なことではあるが、言葉を換えて言えば、療育者は子どもの行動に対して受け止めてその後なんらかの形でもって投げ返すという行動でもって反応しているのである。このことは非常に重要な意味を持っている。そうした投げ返す行為の主体である療育者は自らの主体性を持って受け止め、投げ返していくそのプロセスの中で、その人のこれまでに培ってきた何らかの価値基準（文化的枠組みとでも言ってよいかもしれないが）が働いていることは間違いない。最も重要な点はここにある。実際にどのような行為でもって投げ返しているのであろうか。そのことを第三者に指摘してもらうことはとても大切である。つまり、第三者にはその行為がどのように感じられたのか、受容的に感じられたのか、それともそうではなかったのか、そうではなかったとしたらどのように感じられたのか、そう感じられたのはなぜなのか、といったことを問題として取り上げていくことはとても大切であるように思う。なぜならわれわれは何らかの行動を起こす際に、意識していることと実際の行動には何らかのずれがあるからである。行動と意識のあいだにはこのようなずれが起こるのは必然的なものといえるのであるから、そのこと自体に問題があるわけではない。そうではなくてずれがあたかもないかのように思い込んで、自分の行動を問題視しようとする人々の態度の方が実は深刻な問題なのである。

東海大学健康科学部で母子臨床を行っていて痛感するのは、養育者に限らず療育者（治療者）もともに、自分の意識と行動のあいだのずれを問題として取り上げることに大きな困難が伴うことである。つまりはそのことを取り上げられることに対する強い抵抗やさらにはかなり深い病的な防衛が働きやすいということである。それはなぜかといえば、無意識の層の心の問題がその中に強く反映されているからなのである。本人としては触れられたくない部分をあからさまにされることに強い不安が生じてくるのである。

なぜこのような無意識の問題まで取り上げなくてはいけないのであろうか。ことばのない世界でもって他者と交流をしている（交流がもてないという水準でもって交流している場合も含めて）際には、筆者が常日頃主張している情動の世界での交流が活発になっ

ている。あるいはそれがほとんどだと言ってもいいほどである。この情動の世界での対人交流はどのような内実を持っているのであろうか。これまでの科学はこの情動の世界を極力避けて通ってきた。あまりにも実態のない代物で、そんなものを扱いだしたら科学者としては泥沼に落ち入ってしまい実のある研究業績が得られないという危惧が強く働いているとさえ思えるのである。従って客観的に把握可能な行動面のみを取り上げることにエネルギーが費やされてきたのではなかろうか。

しかし、これまで述べてきたことを考えてみると、行動面のみを取り上げることに大きな問題があることは容易に理解できよう。子ども、療育者ともに彼らの内的世界（内的表象）をも問題として取り上げる必要性が必然的に浮かんでくる。

さてこれまで療育者の立場から受容するという問題を考えてきたが、ここで少し視点を変えて子どもの側に立ってみてみよう。自閉症に限らず子どもの中には気質的にみて外界の刺激に対して非常に過敏で傷つきやすい子どもが少なからず存在する。児童精神科治療の対象となっている子どもの中にはそうした特徴を持っている人が少なくない。彼らは自分から積極的に、能動的に、自発的に自らの欲求に基づいた行動を取ることに強いためらいが認められる。そうした傾向がどうして出現するのかについては生物学的脆弱性などを考慮する必要があるが、彼らとなんらかの関係を持つとうとする際には、養育者でさえも非常に困難なことが多い。養育者でも療育者でも子どもに対してなんらかの世話や援助をしようとする意欲は、子どもの側の存在自体、表情、仕草などを初めとした何らかの行動によって誘発されることが実はとても多いのである。一般の育児を見て思うのであるが、子どもがいかに常に養育者の注意を喚起しようと何らかの働きかけをやっているか、ちょっと想像してみるととてもよくわかる。子どもの側のなんらかの働きかけに基づいて養育者が応答しているということが実は育児の構造を考える上でも非常に重要なところである。養育者がこれほどまでに子どもの行動に対して反応しているのは、恐らくは子どもに対する愛おしさ、かわいさなどといった愛情と通俗的に言われているような性質の感情が基盤にあるからなのであろう。

自閉症といわれる子どもたちはこうした敏感さが一際目立っている子どもであることは間違いない。どのような刺激に対して過敏なのかについてはこれまで知覚異常ということでもって説明されているのであるが、知覚異常とみなすことには大きな問題があると筆者には思えるのである。というのも知覚は発達の的にみると、その原初的様態として無様式知覚の働きが優位な状態であると思われるのである。人間においてコミュニケーションが情動的水準から象徴的水準へと進展していくのは、対人交流ないし社会性が加齢とともに飛躍的に広がっていくことと不即不離の関係にある。社会性の広がりに伴い、

より高度な象徴的コミュニケーション能力が要求されるようになるわけである。そうしたコミュニケーションの進展過程において感覚器官もそれに伴い機能分化が生じていくのである。自閉症において指摘される知覚の歪みとか知覚障害といわれるものは、実は発達の観点から考えると、社会的存在としての人間へと発達していく生物的存在が、対人交流の蓄積が得られず停滞しているがための必然的結果であって、知覚障害の存在ゆえに、対人交流が成立しない、つまり自閉的な状態にとどまっているのではないと思えるのである。筆者がこれまで一貫して主張してきた自閉症の原初的知覚様態の存在はこのことを意味しているのである（小林、印刷中b）。

人間は生物的存在であるとともに社会的存在である。両者が本来の発達速度で相互補完的に作用しあいながら発達し展開し、その時点の存在のあり方は、永続的に変容し続けるわけであるが、このような発達観は今日サメロフ（Sameroff）の交互作用発達モデル（小林、印刷中a）や鯨岡（1997）の関係発達論として少しずつわが国においても浸透しつつある。しかし、いまだ発達現象を個体能力に引き寄せてしか捉えられない人々が実に多い。それは恐らくこれまでの学問の流れを抜きにしては考えられないのである。

本稿を書いてみようと思いついたのは、「受容する」といういささか使い古されあまりにも誤解されやすい概念についてもう一度捉えなおしてみたいという動機からであった。受容される側の自閉症児がいまだ社会的存在になりえていないことと受容する側のわれわれが社会的存在たりえていることの大きなギャップ、このことは現実の子どもとの対人交流の質をどのように規定しているか、そのことが子どもにはどう感じられ、われわれにはどのように感じられているのか、そんなことをまずもって考えてみたいと思うのである。社会的存在としてのわれわれが身にまとい、それから自由になることが困難なもの、すなわち種々の価値観や常識などから少し距離をもって見つめ直すことがとても大切なことであり、いかにわれわれが自由な存在になりえていないか、そのことを意識化、客観化していくという作業が自閉症の子どもとの交流をより生き生きとしたものにしていくと思えるのである。日頃われわれが等閑に付してしまっていることを、自閉症の子どもたちとの交流を通して取り戻していくことにもつながっていくのである。とするならば、療育という営みは、われわれが彼らに対して援助する側に立つという一面的なものではなく、子どもたちからわれわれもある意味では援助されているという面をその一方で持っているのではなからうか。自閉症療育の魅力にとりつかれている人々はおそらくそのような側面を体験から気づいているのではなからうか。

本稿で「受容する」ということが、コミュニケーション発達の観点からどのように捉え直すことができるかを、思いつくままに述べてみた。気軽な気分で書き始めたのであ

るが、このテーマは実は非常に重いものを含んでいる。私見をきちんと展開するのはまた別の機会にしたいと思う。ただ袖ヶ浦のびろ学園の職員の皆さんにとって日頃の療育を振り返る際の何らかの刺激になればという思いで筆をとった次第である。

文 献

小林隆児(印刷中 a)．自閉症—交互作用発達モデル—．こころの臨床、増刊号 特集：精神障害の仮説、星和書店．

小林隆児(印刷中 b)．自閉症の発達精神病理と治療．岩崎学術出版社、東京．

鯨岡 峻(1997)．原初的コミュニケーションの諸相．ミネルヴァ書房、京都．